

一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ ニュースレター 創刊号

Threshold

～すれっしょんど～ (出発点)

神戸薬物・アルコール依存リハビリテーションセンター

地域の暮らしの中で、薬物依存からの回復を目指して



神戸にダルクが開設しました。

皆様、大変お待たせいたしました。昨年 8 月に開設した「神戸ダルク ヴィレッジ」のニュースレターが、NHK 歳末助け合い助成金のおかげで、発行することができました。

私たちは、三ノ宮から一駅東「阪急春日野道駅」かすがの坂商店街の一角にて、神戸市の障害福祉サービス「自立訓練」制度を利用して、回復のための活動を行なっております。

これまで、神戸には専門的に薬物の問題を日夜問わず、仲間と肩を並べ、お互いにサポートしながら活動する拠点は存在しませんでした。

そんなことから、兵庫の薬物依存問題に対しての取り組みは、近隣他県に比べ遅れている部分もありましたが、地域各関係機関と、神戸ダルクが協働していくことによって、地域で苦しみ、誰にも言えない悩みを抱えた、本人、家族が、秘密が守られ安心して、相談ができる再出発へのチャンスを生み出す場所として、神戸ダルクが「今までとは違う生き方によって幸せをもう一度掴む場所」になればとの願いから、開設に至りました。

資金的にも非常に苦しいですが、昼夜問わず依存症に苦しむ地域の人々が、こんなにたくさんいることを実感する今、私たちにできることを、私たちが同じように助けられたように、全力でサポートしていきます。薬物依存からの回復は簡単ではありません。夜間の宿泊寮も始まり、ダルクでの共同生活に加えて、地域の皆さんの協力の中、一人でも多くの依存症者が幸せを掴めるようになることを願いながら活動していきます。

こんな神戸ダルクですが、皆様どうか暖かくご支援ください。よろしくお願いいたします。

一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ

自立訓練(生活訓練)神戸市障害福祉サービス事業所 デイセンター リカバリー

〒651-0068 兵庫県神戸市中央区旗塚通 1-1-20 長坂ハイツ 2F

TEL 078-224-4244 FAX 078-219-9741 e-mail kobe.darc@gmail.com

www.kobedarc.org

神戸ダルク

検索



梅田靖規 プロフィール
昭和47年12月22日生

20代の時に薬物依存になり34歳で茨城ダルク入寮。

その後、ダルクの職員となり各ダルクで研修を経たのち退社、その後木津川ダルク・アパリにて活動し、米国治療共同体アミティにてトレーニング後、フィリピン薬物依存症者支援のプロジェクトのための活動に従事する。

昨年8月より、神戸ダルクヴィレッジを開設
本年2月より、障害者福祉サービスの自立訓練(生活訓練)事業所の認可を受ける。

ダルク入寮後に高認試験、通信大学を卒業し、大学院修士課程として学びながら、精神保健福祉士の専門校を卒業し、本年4月より精神保健福祉士となる。

双子の二兄の父。

回復の街神戸で生きる

神戸ダルクヴィレッジ 代表理事 梅田靖規

神戸ダルクヴィレッジ代表理事の梅田です。

私の出身は愛知県の岡崎市で、薬物依存症当事者です。9年間の覚せい剤の依存で人生がどうにもなくなり、茨城のダルクにつながりました。それから自分では絶対に不可能と確信していた薬物使用が奇跡的に止まり、漸く9年が過ぎました。

9年前には、自分が薬物をやめられるなんて思ってもいませんでしたし、それにやめたところで自分の人生など何も価値がないと思ってダルクにつながったのが、私の出発点でした。

やり直したい。薬物をやめたい。回復したい。そんな気持ちでダルクにつながったんじゃないかなと思います。正直言えば、全て諦めて、自分自身の生き様にも嫌気がさして、疲れ果てて、ゴミ箱に捨てられる感覚でつながった気持ちを思い出します。けれども、それが必要だったのだと思います。そんな簡単に人生に光が射すほど素敵に回復が始まったわけではありません。しかし、僕の回復はその時にはすでに始まっていた。何度も失敗しました。ダルクにつながってからの再発は惨めで、気持ちよくもなんともありませんでしたし、その時にダルクにもう一度助けてほしい。本当はやり直したいし、やり直して謝りたい人がたくさんいるんですと連絡しました。それから薬物が止まっています。ただ単にロクでもなく薬物を使ってきただけなのに、ずっと向かい風の中を生きてきたことを初めて知りました。というのも、今でもはっきりと覚えているのですが、その電話をした時に、ピタッと向かい風が止まった感覚がありました。

2007年11月8日。薬物が止まり始めたのもその日からでした。

私はこれまでの回復の中で多くの人と出会ってきました。その出会いが自分の人生にもう一度光を与えてくれたと思っています。同じ依存症の仲間であったり、支援者の方々であったり、一緒にこの

仕事をする仲間であったり、学校のクラスメイトであったり、今、神戸ダルクに相談に来る方々であったり、そんな毎日の出会いに感謝することができるのも、薬物をやめられず、涙を流していた自分を支えている気持ちにさせてくれる、つながってくる仲間と共に過ごせる時間が与えられているからだだと思います。大変な人ばかりです。赤字になるサポートばかりです。依存症から回復するのって、大変なことなんです。だから私たちも真剣に向き合うことを要求されます。

ここ神戸には、薬物依存の問題で苦しむ人々が本当にたくさんいます。今はなき、街のど真ん中にあった、関西じゅうから人が集まってきていた有名「危険ドラッグ店」が残っていた残骸の実態は実は誰も知りません。規制されて購入できなくなったユーザーは今どうしているのでしょうか？違法薬物に変わっただけでダルクもしくは、刑務所につながってきているのが実際です。

そのような現状で、今、神戸ダルクには多くの人々が相談に来ます。当時の私と全く同じ状態の人ばかりで、「やめたいけれど、どうしていいかわからない」という言葉は、自分も同じように思っていました。

私にできることは、自分に変化が起きて来た様々な経験を分かち合い、「必ず回復できる」ということを伝えることに尽きます。

神戸という街は、回復、復興、それを経験した街です。どうにもならない状態を出発点にして来た街で、そんな神戸にもう薬物で未だ苦しんでいる人がたくさんいます。神戸だからこそできる「回復の民力」のつながりを信じて、私は目の前の神戸ダルクの仲間と一日一日を共に歩くことが生きる糧であります。若輩者ではありますが、どうかご支援いただけることを心よりお願いいたします。

神戸の街のダルクに期待します 公益財団法人復光会垂水病院 副院長 麻生克郎先生

日本の薬物乱用と言えば、覚醒剤(メタンフェタミン)と相場が決まっています。この覚醒剤について、第一次濫用期、第二次濫用といった区分けがあって(第三次濫用期という言葉もありますが二次、三次の区別は判然としません)、その間の時期、1957年頃から10年ぐらいは、覚醒剤の問題がほとんど鎮静化されていました。ところがちょうどこの時期に、覚醒剤にとって替わってヘロインが流行していました。ヘロインは、世界的には最も濫用されている薬物のひとつですが、どうも日本では流行らないようです。戦前の昭和8年、東京の葛飾区に、今のダルクのような、麻薬中毒者救護会収容所という施設ができて、ヘロイン中毒者が入所していたのですが、その入所者の大半が朝鮮半島出身の人たちであったと記録されています。余談ですがこの救護会の評議員には、神戸の社会活動家、賀川豊彦が名を連ねています。一方近年では、2000年頃から、垂水病院で、数十人のヘロイン依存症の人たちを治療していましたが、これもほとんどが東南アジア系の難民の人たちでした。ところが、この1960年前後だけは、日本の社会で唯一、本格的にヘロインが流行したのです。

ヘロインは海外から密輸入されますから、ヘロインの流行も港から始まりました。当時の日本の最大の貿易港は神戸と横浜で、この二つの都市のヘロイン問題は深刻でした。市議会でも問題になり、神戸のヘロイン中毒者の治療を進めようということになりました。おそらく地元の医療機関がみんな消極的だったのでしょう、当時、最も多くヘロイン患者を引き受けていたのが、千葉の船橋にある総武病院という精神科病院でしたが、その母体であった「復光会」という財団法人が、神戸市に新病院を開設することになりました。場所が当時は垂水区にあったので「垂水病院」と名乗りました。1961年に開設されたのですが、当時の入院患者の病名を見ると、大半がヘロイン中毒で、時々「精神分裂病」や「アルコール中毒」などが混ざっているという様子で、ずいぶん変わった精神科病院でありました。ちなみに横浜では、芹香(きんこう)病院という県立精神科病院の隣に「せりがや園」というアルコール薬物専門の県立病院を、垂水病院に2年遅れて開設しています。

このときのヘロイン流行はけっこう深刻で、さまざまな人々が、なんとかしなければいけないというリアクションを示しています。国は麻薬取締法を強化して、措置入院制度や医師の通報義務、麻薬中毒者への麻薬投与の禁止などを決めました。その一方で、神戸の山口組の三代目田岡組長も、配下の組員がヘロインに苦しむさまを見て心を痛め、組としてヘロインの取り扱いを禁止する一方、いろんな人に呼びかけ、麻薬追放国土浄化同盟という組織を作りました。ここには参議院議員の市川房枝、作家の山岡荘八、立教大学総長の松下正寿、関西主婦連の比嘉正子などが名を連ねていたと言われています。当時、山口組の組員と主婦連の活動家が一緒に麻薬追放のビラ配りをしたという話も残されています。

官民挙げたさまざまな人々の努力や願いのおかげでしょうか、その後のヘロインの濫用は収束し、今に至っております。垂水病院と同じ時期にできた弟分の、横浜のせりがや園は、近年、神奈川県立精神医療センターに吸収されましたが、それでも「SMARPP」と呼ばれる薬物依存症への認知行動療法アプローチの発祥の地として名を残しています(「SMARPP」の頭のSは「Serigaya」のSです)。それにはかきませんが、垂水病院も50年以上の間、薬物関連障害の治療を引き受けてきました。せりがや園と違って民間病院ですから、お金も人も乏しい中で苦勞していますが、これを支えてくれるものもあります。開設者である公益財団法人復光会の設立者は、終戦まで内務官僚として厚生行政に携わってきた岡田文秀という人で、上記の戦前の麻薬中毒者救護会の評議員にも名を連ねていて、復光会を創ったときに、創業三原則と言うものを定め、その一項目で「中毒性精神障害者の診療を特色とする」と謳っているのです。依存症の治療で困難に遭遇することはたびたびありますが、依存症の治療を受け、切り開いていくことに反対の声は上がりません。創業から64年になる今も創業者の威光が残っているのを感じます。

大阪ダルクが1993年に開設され、それ以来、いろいろな面で相互に頼り、頼られる関係ができてきたのではないかと思います。それでも、神戸市の西の端、ほとんど三木市にあると言ってよい垂水病院からは、やはり大阪は遠いです。「そのうちに神戸にも・・・」と、ずっと期待していたのですが、このたび、やっとダルクが誕生しました。入院中してきた人に「一度行ってみたら」と声をかけるのもずいぶん気楽になりました。いろんな薬物のエピソードで彩られた歴史を持つ神戸の街で、ダルクがどんな歴史を作っていくのでしょうか、とても楽しみです。

神戸ダルクプログラム

生活訓練事業所 デイセンターリカバリー	ナイトハウス
	8:00 起床
	8:30 朝食
9:30 デイセンター開所	デイセンターでプログラムを受けます
10:00 アファメーション〜グループワーク	
11:00 食材買い出し〜昼食準備	
12:00 昼食	
14:00 グループワーク ボランティア SMARPP、12ステップワーク等 運動・登山	
17:00 清掃	
17:30 デイセンター 閉所	
19:00 NA ミーティング参加	19:00 NA ミーティング参加
	20:30 ナイトハウスに戻る
	23:00 就寝

神戸ダルクパンフレットより若干、時間の変更があります。



SMARPP-24

薬物・アルコール依存回復のためのワークブックを使った、動機付けを中心としたプログラムを毎週1回24週行います。各機関でも行われているプログラムですが、ダルクにてピア・ファシリテーターが行うことによって、より共感的な視点でプログラムを行うことができます。

登山プログラム(森林セラピー)

神戸は、屏風のようにそびえ立つ六甲山と海に挟まれた不思議な地域で、毎日のように山の色や景色も変わります。その六甲山に月に2回ほど、みんなで登り、その中でお弁当を食べたり、自然を感じたり、おしゃべりをしたり、自然の中での音や感覚に自分を任せ、日々の余計なストレスから解放されることを目指します。また、山頂に立った時の達成感が自分の自己肯定感を高めるのに非常に効果的です。よくみんなで話しますが、素晴らしい景色の中で「この場所では薬使う気持ちにはなへんなあ」と。そんな気持ちを養います。



ダルクプログラムって？

ダルクのプログラムでは、一体どのようなことが行われていて、どのようなことが効果的なのかと、多くの方が疑問に思うでしょう。ダルクでのプログラムの一つ一つが非常に効果的であるというよりも、ダルクという「居場所」では、利用者の安全が守られ、ありのままの自分でいられること、そして、同じ思いを持つ仲間が、いつでもどんな時でも一緒に、楽しさも苦しさも共有するところにあると思っています。私たちは、こんな自分でも普通に扱ってくれる友達以上の関係というものを、どこにも失っていました。

ダルクは失敗しながら成長するところです。失敗はいつでも最大のチャンスにしてくれる仲間がいつも隣にいます。そしてともに過ごす仲間とプログラムを作り上げていきます。一人一人が大切に必要パートナーです。



グループミーティング

私たちの、プログラムの基本が、このミーティングと呼ばれる、グループワークです。仲間の経験に耳を傾け、意見をしないものや、仲間の苦悩に寄り添うものなどが行われます。正直になる努力をすること、仲間を支えたい気持ちを見出すことなどが大切な鍵となっていきます。



アートセラピー・クラフトワーク

遊びの要素や、感性を分かち合う時間と空間を共有します。子供のように、またアーティストのように様々な道具や色を使って分かち合います。また、日曜大工のような木工作業なども行います。



12 ステップワーク

毎日のミーティングだけでは理解しにくい12ステップとNA サービスに関する12の伝統などを実践的なワークを行いながら、実践に活かしていきます。スライドを見ながら学んだり、テキストを使ったり、疑問などを分かち合いながら進めていきます。これは実際にダルク退寮後のセルフサポートに非常に効果を示します。

ヘルスケア プログラム

薬物をやめ始めると、薬は止まったものの、健康に対して無頓着になりがちです。ダルクを卒業して一人暮らしを始めると生活習慣病などになる仲間が非常に多いことから、食生活、健康、運動などについて学んだり、エクセサイズしたりします。物事をポジティブに考えるには健康は不可欠です。最初は万歩計を持ち歩くことから……



ヨーガプログラム

ヨーガ療法士の先生方に定期的に来ていただいて、基本的なヨーガの呼吸法などを行います。自己コントロールや、ヒーリングを体験し、またリラックスした時間を過ごすことで、呼吸法を毎日の生活の中に取り入れやすくなります。

次号(3月発行予定)でも、これら以外のプログラムをお知らせしていきます。

仲間の経験と力と希望

私は20歳の頃芸能関係の仕事をしていました。その関係の美容師が、疲れが吹っ飛ばない物があるよってすすめられたのが覚醒剤でした。最初はスピードと言われ覚醒剤と知らずに使っていましたが、本当に疲れが嘘のようになくなり、スッカリした気持ちになって段々と痛みつきになっていきました。しばらくしてそれが覚醒剤と知ってからも疲れを取るために続けていました。私の場合幻聴等ありましたが、特に変になったりすることがなかったので、自分は薬物を上手く使いこなしてると勘違いし、やめようと思えばいつでもやめられると思い込んでいました。それから結局2度逮捕されるまで自分が薬物依存性だと気づくことができませんでした。2度目に逮捕されて懲役に行ったことをきっかけに真剣に薬物をやめたいと考えるようになり、保釈期間中にNAに繋がるようになりました。NAでは薬物依存性は治るということはないと知らされ、自分はとんでもない悪魔に手を出してしまったんだと初めて深く後悔しました。懲役に行く前に京都のスタッフとの面談をして手紙のやり取りもし、出所してからすぐにNAに通い始め、暫くして京都ダルクにも通いそこには自分と似たような仲間がいて、何でも正直に悩みや出来事を話することができ、ありのままの自分であることができたのでここにいるとホッと安心することができました。フェロシブでも悩み事を仲間に相談し助けられ、励まされながら1日、1日何とかやってきましたがそこでもいい仲間と出会い、DARCとNAでようやく落ち着いてきたのも束の間、京都が閉鎖になりどうしようかと迷っていた時に神戸が新しく開所されることを知り、すぐに面接に行きました。今はまだできたばかりで人数も少ないですが、施設長はすごく意欲的な方で毎日忙しく動きながらも色んなイベントや私達のスケジュールも考えてくれてようやく前向きになり始めて以前は私なんてって思っていたのが私に何かできることを考えるようになりました。私が仲間から買った物をこれからは私も新しい仲間に伝えて共に回復していけたらと思います。

応援しています “神戸ダルクヴィレッジ”

支援者の方々

(特) ひょうごセルフヘルプ支援センター 代表 中田 智恵海先生

昨年、ここ神戸にダルクヴィレッジが創設されました。この創設は神戸のセルフヘルプの関係者にとって約20年間の願いでした。今、スタートを切った神戸ダルクにこころからのエールを送ります。

時折、薬物依存症者の有名タレント、あるいはその犠牲となった市井の人々などがマスコミで取り上げられ、騒ぎとなっています。しかし、その回復の過程について地域社会で語られることは多くありません。意思が弱いというような素人の考えは的を射たものではありませんし、回復への確実な方法は医学や心理学といった専門的な知識からは明らかにされていないからでもあるからでしょう。

回復のための方法が専門職者には明らかにされていないにも関わらず、ダルクでは入所者が回復する、という実態がある、だからこそダルクが世界中で信頼されている施設なのでしょう。そこにあるのは12ステップになったミーティングを主とした当事者同士のピアサポートです。

人は生きていくことが辛いほどの困難に出会った時、その困難が解決し難い時、「こんな経験をするのは自分ひとりだ、この辛さは経験した者でないと分からない」と絶望します。そうした人たちがダルクという場で仲間同士が出会って、「ひとりじゃない」「分かりあえる」「共に生きていこう」と生きる勇気や希望を得るのです。

中にはダルクでは充たされなくて入所しない人、退所する人、ダルクの存在を知らなくて繋がらない人等々、さまざまにおられることでしょう。しかし、だからといってダルクの意義を軽視することにはなりません。回復できた人が一人でもいれば、あるいはダルクという場で薬物から解放されて生き直しを試みた、それが大切なことだと思います。生きることはプロセスですから。

大変な仕事に取り組まれているダルクの世話人の皆さまに敬意を表し、ひょうごセルフヘルプ支援センターとしても大いに応援したいと考えております。困った時にはお声をおかけください。そして、成果を急がず地道に、そしてタフに歩んでくださいますようにと願っています。

これまでの活動報告

8月1日に神戸ダルク ヴィレッジを開所し、地域の様々な機関を訪問しながら、サンテレビさんをはじめとする神戸でのTV・ラジオ・各新聞社様の、神戸市をよい街にしたいという気持ちからのご協力によって、たくさんの市民の方が「神戸ダルク」の存在を知っていただくことができました。

そのことにより、毎日の相談電話などの対応がほとんどでした。

そんな中で、薬物依存症とは直接関係してこなかった、福祉ボランティア団体や福祉サービス事業所などの見学や相談なども多数あり、今年に入り、各種行政、司法、医療機関との繋がりや計画も増えてまいりました。様々な対応から、ご挨拶などもできていない機関などもたくさんありましたが、2月より神戸市の障害福祉サービス「自立訓練（生活訓練）事業所」として認可を受けた今、地域の一つの歯車として活動できることを切に願うばかりです。そして、各地のダルクと連携をしっかりと取りながら活動していきたいと思えます。

3月末に発行予定の「神戸ダルク ヴィレッジニュースレター第2号」にて、具体的な活動報告や、活動予定・展望をお伝えしたいと思います。

神戸ダルク ヴィレッジ広報誌「Threshold」年間購読のお願い

このニュースレターはNHK歳末助け合い義援金によって発行されています。本来ならば、低料第三種郵便を取得し、安価にて、みなさまに定期的にお送りしたいのですが、制度が変わり400名以上の定期購読者がいなければ利用することができなくなりました。ですので、年間購読費は年6回発行で2000円になります。お申し込みはFAX、電話、メール、または同封の振込用紙にてお願いいたします。お申し込みの際は「住所・氏名・電話番号」を必ず明記ください。

※ 配布用に、当ニュースレターを置いていただける場合はご連絡ください。たくさんの方に読んでいただけるように希望数を郵送いたします。私自身もこのような広報資料を見つけたことがきっかけで回復の場所を見つけることができました。ぜひ、まだ苦しむ依存症者の助けとなるようにご協力ください。

支援会員のお願い

神戸ダルク ヴィレッジでは、支援会員として、活動を支えてくれる方を募集しています。

兵庫県内の薬物依存症者を助ける活動をご支援ください。

個人会員は1口 1万円からになります。ご連絡をお待ちしています。

神戸ダルク ヴィレッジ TEL 078-224-4244 FAX 078-219-9741 e-mail: kobe.darc@gmail.com

相談・面談のご予約、お問い合わせは

★月曜～金曜 10:00～17:00 ☎ 078-224-4244

★毎週火曜・木曜 18:00～22:00

メールは24時間OK。 kobe.darc@gmail.com

本人、または家族、関係者からの薬物問題に関する相談及び、講演などに関する依頼なども上記の時間内にて受け付けております。気軽にご連絡ください。なお、相談の内容に関しては秘密は厳守します。警察や他機関への通報や記録の漏洩などは一切ありませんので安心してご連絡ください。

逮捕・勾留中の方々への支援

刑務所・拘置所・留置所への面会、手紙などによる逮捕者及び保釈中の方への裁判での情状証人出廷や、刑務所出所者への薬物からの回復を希望する方の引受人としての指導対応や、出所前面談など、他機関と連携しながら対応しています。また、資料請求などもご連絡いただければ対応いたします。

メールでの相談事業・夜間電話相談事業は、

毎日新聞大阪社会事業団様の助成金によって運営されています。詳細は次号

神戸ダルクへのご献金・献品のご支援本当にありがとうございました。

開設から今日までをたくさんの方々に支えられてきたおかげで、仲間一同、回復のプログラムに取り組むことができています。心より感謝いたします。これからも暖かく見守ってください。

ご献金

高木扶美子様 公益財団法人復光会 垂水病院 麻生克郎様 幸地クリニック 幸地芳朗様 久保田勤・晶子様
鳥取ダルク 干坂雅浩様 神戸市薬剤師会 伊藤清彦様 高筒明子様

ご献品

川崎ダルク岡崎重人様 神戸メンタルサービス 平準司様 和歌山ダルク 島田ゆか様 附築久晴様
桑原弥生子様 京都ダルク様

(平成28年7月11日～平成29年12月31日到着分・順不同)

助けてください。緊急支援のお願い 献金・献品をお願いいたします。

神戸ダルク開設して半年が過ぎました。開設したばかりで非常に苦しい状況であります。非常に心苦しいのですが、ご寄付及び、ご家庭で余っている日用品の献品をお待ちしています。本当に厳しい状況で、皆様からの支援でなんとか成り立っており、依存症者の回復の場所を絶やさないようにしたいと考えていますので、何卒ご支援のほどよろしくお願い致します。ご家庭で余っている食料品(米、野菜、乾物、味噌、醤油など)から、洗濯洗剤やシャンプー、石鹸、また自転車や毛布、暖房器具などがございましたら、神戸ダルクまでご献品ください。

また、神戸において立ち上がったばかりで、相談業務に明け暮れる日々の中、運営資金も非常に苦しい状況です。本当にお恥ずかしいのですが、このままでは年末まで施設維持ができるかわからない状況です。みなさま、本当に助けてください。よろしくお願い致します。

ご寄付振込先口座 ゆうちょ銀行

口座番号 00950-9-275937

口座名 シヤ) コウベダルクヴィレッジ

店番 〇九九 0275937

献品の送り先住所 651-0068 神戸市中央区旗塚通 1-1-20 長坂ハイツ2F
一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ

編集後記

この半年で色々なことがありました。たくさんの人と神戸ダルクの開設によって出会うことができました。これからも出会っていくのでしょうか。このニューズレターを手にした人の繋がりで、一人の依存症者が回復のきっかけを見つけることにつながることであれば...と祈りながらこのニューズレターを作成しました。薬物依存は絶対に回復できます。いつでも私たちは待っています。

神戸ダルク ニューズレター Threshold (出発点) 創刊号
編集 一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ 梅田靖規
印刷 プリントバック
〒651-0068 兵庫県神戸市中央区旗塚通 1-1-20 長坂ハイツ 2F
TEL 078-224-4244 FAX 078-219-9741
e-mail kobe.darc@gmail.com
www.kobedarc.org
価格 1部100円 年会費 2000円 (購読料は年会費に入ります)
※ 年間購読についてはAページをご覧ください。
※ 今回は販売代金はいただいております。

NHK 歳末
たすけあい
助成事業

この広報誌は NHK 歳末助け合い義援金により発行しています。